

貯水型雨量計

「雨量計」とは、降水量を測定する気象測器です。「降水量」とは、ある時間内に降った雨や雪などの量で、水平な面にたまった水の深さを表します。そのため、単位は「mm」です。また、雪などの固形降水の場合は、溶かして水としたときの深さで表します。

雨量計には様々な型のものがありますが、降水量を直接測定する代表的なものには、「貯水型雨量計」と「転倒ます型雨量計」です。気象庁では、現在は「転倒ます型雨量計」を用いて自動的に測定していますが、かつては「貯水型雨量計」を用いて、観測者が目視で測定していました。

貯水型雨量計は円筒形の筒で、受水器、漏斗、貯水器で構成されています。右写真(下)では、真ん中の筒の中に右側のバケツ(貯水器)を、筒の上部に左側の受水器・漏斗をセットすると、写真(上)のようになります。受水器部分に降ってきた降水は、漏斗部を通り貯水器にたまります。実際には、バケツの中に降水をためる瓶がセットされており、そこにたまった水を雨量ます(専用のメモリがついたメスシリンダー)で測定し、降水量を求めます。観測は、毎日決まった時間に行います。

降水を正しく測定するには、雨量計を設置する場所が大切です。浸水しそうな場所や水しぶきがかかる場所、樹木や建物の近くを避け、できるだけ風の影響がない場所に設置します。また、風の影響を受けないよう、できるだけ低く設置します。貯水型雨量計は、跳ね返りの雨水が入らない程度に筒を土の中に埋めて設置します。

貯水型雨量計や転倒ます型雨量計は、実際に降った降水量を測定します。一方、気象レーダーや光学式雨量計は、光の散乱等を利用して、間接的に降水量を測定します。ちなみに、転倒ます型雨量計は、展示場4階に展示しています。



貯水型雨量計

西岡 里織(科学館学芸員)